

出前授業

本紙記者が出前授業（6月19日＝復興面）

浪江小
新聞作りのイロハ

新聞を示しながら児童らに説明する傍田記者（福島県二本松市の浪江町立浪江小学校で）

東京電力福島第一原発事故による全町避難で福島県二本松市に避難している同県浪江町立浪江小学校（児童19人）で18日、3～6年生の児童14人が新聞記者の取材方法や記事の書き方を学んだ。同町の伝統・文化や将来を考える総合学習「ふるさとなみえ科」の一環で、児童らは、講師として訪れた読売新聞福島支局の傍田光路（そばたこうじ）記者（28）の説明を聞きながら、熱心にメモをとっていた。

ふるさとなみえ科は昨年4月に始まった。今年は町の魅力を紹介する新聞作りに挑戦しており、傍田記者を講師に招いた。

傍田記者は新聞を見せながら「いつ、どこで、誰が何をどのようにしたか。それはなぜか」という記事に欠かせない要素や、写真・イラストで新聞が見やすくなることを紹介。「取材相手の気持ちや様子を盛り込むと記事が面白くなる」とアドバイスした。

児童らは来月から町の伝統・文化に詳しい大人に取材し、この秋、それぞれ新聞にまとめる予定。5年生の滝美優さん（10）は「学んだことを生かして記事を書いてみたい」と話していた。

ふるさとなみえ科は、3年生以上でそれぞれ週2時間、授業がある。昨年度は、二本松市内で再開した工房の協力で、浪江町の伝統工芸品「大堀相馬焼」作りに挑戦したり、復興した30年後の同町の様子について、立体模型を作ったりした。